

【熊本公德会賞】

家族

宇土市立網田中学校 3年 鳩野 夕音

私の家には母がいません。これまで母の役割は父と祖母が補ってくれていました。そのおかげで私は不自由のない毎日を送り、困ったことや寂しい思いをせずに過ごしてきました。

父は建築関係の仕事に就いています。朝も早く、私たち姉弟が目覚ます頃にはもう仕事に行っています。そして、建物の壁や天井をつくったり、重いものを運んだりして、いつも疲れて帰ってきます。それなのに父は、毎日の肉体労働の後に、家のことをしてくれていました。それで、私は父に聞いたことがあります。

「仕事の後に家事をやってきつくないと？」すると、「お母さんがいないから自分が頑張るしかない。」という答えが返ってきました。

私はそれまで、母の代わりは、父がやって当然だと思っていました。しかし、改めて言われると、それは当たり前ではないことに気付きました。父が私たちを育ててくれなかったら、今のこの生活はないのです。

それで、中学生になった頃から、私は家の手伝いをするようになりました。鳩野家の私の役割は、洗濯、掃除、皿洗いです。とは言うものの、家事をしていると、自由な時間も勉強の時間もなくなります。手伝いを始めた頃は、やりかけた仕事を途中でやめてしまうことも多くありました。特に、冬は寒くて家のことをするのが嫌になります。それで、「自分の時間がほしい。」とか「同級生でこんなことをしているのは自分だけだろうな。」とか思うこともあります。

しかし、掃除の後、家の中を見た父が「きれいになったね。」と驚くのを見ると、満足感でいっぱいになります。しかも、私が掃除をすると、父の家での仕事の一つ減るのです。それで最近では、「言われなくてもする。」、「中途半端でやめたりしない。」というのが当たり前になってきました。

父は時々、「まさか、俺が一人で子供を三人も育てるなんて思いもしなかった。」と言います。私の家は姉弟三人なのですが、一番下の弟は小学4年生でまだまだ手がかかります。仕事で疲れているはずなのに、父は休日には私たちを必ずと言っていいほど、どこかに連れて行ってくれます。時々、父と姉弟三人で近くのグラウンドで、誰が速いか競走するのですが、父にはまだまだ勝てません。しかし、一番下の弟は負けず嫌いで、「俺が勝つまでもう一回。」と言って、何度も何度も走ることになります。クタクタになっても、これが家族四人で過ごすかけがえのないひとときです。こんな時間を過ごせるのも父のおかげです。一人で家族を支えようとしている父は、本当にすごいと思います。

そんな父の最近の口癖は、「一度きりの人生。思い切り楽しむ。」です。私は父のこの言葉にいつも救われています。悲しいことや、つらいことがあっても、ポジティブに行動する父。私も父のように前向きに考えられる人になりたいです。そして、たくさんの人に勇気を与えられる存在になりたいと強く思っています。